

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 医学部 教授

氏 名: 橋口 照人

授業科目名	選択実習
研修先(国・地域) 滞在地	ディポネゴロ大学(インドネシア・スマラン、ジェバラ)、ソウル大学(韓国・ソウル)、 マインツ大学(ドイツ・マインツ)、国際神経科学研究所(ドイツ・ハノーファー)
研修期間	平成30年 3月17日 ~ 平成30年 6月20日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>今回の海外研修を行った学生からの面接ならびに報告書を通して指導者として感じたことは、学生たちは「国際的医療とはどのようなものか」「グローバルとは何を言うのか」といった観点からしっかり学んできたことが伺えた。ドイツ・ハノーファーで研修した学生の報告書にある「ヨーロッパで働く医師と接して国境は関係ないのだと教わりました」は海で囲まれた日本に住む学生の素直な印象であろう。また、全ての学生の話から「語学力が必要である」ことが「必然のこと」として伝わってきた。当然のことながら研修先では「英語での会話は日常」であったのである。また、ドイツの学生は医療者としての経験者が多く、同じ学生でありながら、医師になることへの意識や熱意の違いを感じたことを述べているが、この点については、将来の日本の医学教育改革において指導者として考えるべきことである。実習内容においては全ての学生が積極的な臨床参加型実習の指導を受けていた。ソウルに留学した学生は症例のプレゼンテーションの機会までいただき相当の自信になったようである。海外からの留学生に対して濃厚な臨床参加型実習を提供できるシステムの構築を日本においても今後考えるべきであろう。</p> <p>インドネシアにて研修した学生の学びも実に得ることが大きかった。学生は「インドネシアの方が日本人よりよほどレベルの高い勉強をしている」と感じたそうである。そもそも、「インドネシアは途上国と考えていたことが間違いであった」ことにも気付いたそうである。日本ほどに恵まれた自国語の教科書の無い環境で、英文原著の教科書を読んで「必死に」勉強しているインドネシアの学生の姿は何よりのロールモデルになったはずである。</p> <p>そして今回の学生の研修を通して最も感じたことは、全ての学生が研修先において温かく迎えられ、現地の教授をはじめスタッフの方々と心の触れ合いを持てたことである。複数の国籍の学生と共に学び、触れ合ったことの実験は将来グローバル・グローバルに活躍してくれるであろう彼らに深い刻印を残したと思う。現地のスタッフの皆様方に心からの感謝の気持ちで一杯である。</p> <p>最後に、今回の学生海外研修への支援をいただいた前田芳実 学長に心から感謝申し上げます。学生の一人は「鹿児島の医療を世界水準にすることを目標」とした観点から今回の研修に望んだそうです。鹿児島に残って活躍して欲しいと願う学生であればこそ、今回の様な海外での経験をさせるべきであると感じた次第です。学生の学びは我々教員の想像以上に実りあるプログラムであると思います。有難うございました。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>本研修に参加した学生の得た学び、感銘、グローバルな視点を是非、後輩の学生に伝える機会を作ってあげたいと考える。後輩の学生のモチベーションの向上に大きく貢献すると考える。</p>	